

非暴力平和隊・日本(NPJ) ニュースレター

第92号

2025年4月18日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 1階 A 室
スペース御茶ノ水気付 非暴力平和隊・日本

Tel: 080-2678-5973 E-mail: office@np-japan.org

Website: <http://np-japan.org/>

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

・デイヴィッド・ハートソーへの感謝	君島東彦	2
・デイヴィッド・ハートソーを追悼する		3
・インド訪問記	水野郁絵	14
・NARPI 2024 夏季平和構築研修報告	奥本京子	18
・平和講演会・北九州 報告	川辺希和子	21
・カンパお礼		22



訃報： NP 共同創設者 デイヴィッド・ハートソー (David Hartsough)
2025年3月22日、享年84歳 (左上にガンディーの写真)

デイヴィッド・ハートソーへの感謝

NPJ 共同代表 君島 東彦

国際 NGO、Nonviolent Peaceforce（非暴力平和隊）の創設者のひとり、デイヴィッド・ハートソー（David Hartsough）が 3 月 22 日に亡くなった。84 歳だった。

数年前、ユースチームとともに彼にオンラインでインタビューしようという話があったが、それはついに実現しなかった。残念である。

わたしは 2000 年 5 月にニューヨークでデイヴィッドと出会い、それ以来、何度も——たぶん 10 回は超える——彼と一緒に仕事をした。彼は 20 世紀後半から 21 世紀はじめにかけての米国における、もっともすぐれた平和活動家のひとりだった。彼と知り合い、一緒に仕事できたことはわたしにとって宝物のような経験である。だから、この短い文章のタイトルは「デイヴィッドへの感謝」なのだ。

デイヴィッド・ハートソー／君島東彦訳「非暴力という生き方——非暴力平和隊設立への途」（『インパクション』130 号、156-167 頁、2002 年 5 月）も見ていただけると幸いである。

わたしの手元には彼からもらった本がある。Gene Sharp, *Civilian-Based Defense: Post-Military Weapons System*, Princeton University Press, 1990 である。この本の三石善吉氏による翻訳が『市民力による防衛——軍事力に頼らない社会へ』（法政大学出版局、2016 年）である。

デイヴィッドからもらった本には彼の熟読のあとが残っている。ほとんどのページに下線が引いてあり、書き込みがしてある。そして、本の扉に彼の名前が書いてある。いまやこの本は彼の形見になった。

NPJ はデイヴィッドの来日（2000 年 12 月）を契機としてつくられたものだから、彼は NPJ の生みの親である。彼を追悼し、彼の遺志を継承・発展させるためのなんらかの企画（シンポジウムのようなもの）をぜひ開催したいと思う。これから彼の自伝、*Waging Peace: Global Adventures of a Lifelong Activist*, PM Press, 2014 の輪読会をやってもいいかもしれない。

デイヴィッドの冥福を祈る。

デイヴィッド・ハートソーの妻ヤンと子、 ハイジとピーターからのメッセージ（FB から）

最愛なるコミュニティーのみなさま、

2025年3月22日（土）、今朝早くにデイビッドが亡くなったことを、大きな悲しみとともにお知らせします。

この優しい瞬間に、私たちが照らし出したい2つのテーマがあります。

一つ目は、David's joie de vivre: デイビッドの生きる喜びです。デイビッドの生きる喜びは、この地上での旅が終わるまで明らかでした。つい昨日、彼はリクライニングチェアで窓の外を眺めながら休み、スレッシュールド聖歌隊と一緒に歌うことを楽しんでいました。その数時間後には ジョージ・レイキーのブロードウェイ・シング・ア・ロング（ブロードウェイを共に歌う？）に参加しました。晩年は、ヤン、ペーター、ハイジの変わらぬ愛に包まれていた。彼はまた最近、電話で皆さんと多くの会話を楽しみました。

このケアリング・ブリッジに寄せられた返信や、その他多くの愛のメッセージを読みながら、彼は惜しみなく涙を流しました。彼は本当に皆さんの愛を感じていました！

今日、私たちが喪失感と直面する際に出てくる2つ目のテーマは「抵抗」です。デイビッドは最後の最後まで避けられな

いことに抵抗し、4年間のがん闘病生活を力強く生き抜きました。彼はその頑固な回復力と無限のエネルギーを生かし、グランド・ティトンズの高峰をハイキングし、サンフランシスコ湾をセーリングし、愛するエコー湖に沈む果てしない夕日を楽しみました。急速に衰えていくこの1週間、彼は自分の痛み、疲労、衰えゆく身体に戸惑いを示していました。

その一方で、自転車やハイキング、歌を歌う次のチャンスを思い描いていました。デイビッドの真の抵抗精神と、自分のやり方でやるという主張は、最後の最後まで生きていました。

デイビッドが苦しみから解放されたことに感謝します。私たちは、彼のエネルギーとスピリットが星々に加わることで、彼がすでにこの偉大な宇宙を照らす手助けをしている姿を思い描いています。彼はまた、すでにたくさんの「良いトラブル」に巻き込まれていることでしょう。私たちの傷ついた心すべてに感謝とねぎらいの気持ちを込めて、歌います。「心の奥底で／私は信じている／いつか乗り越えられる」と。

Jan, Peter and Heidi

ヤン、ペーター、ハイジ

(DeepL.com で翻訳、加筆)

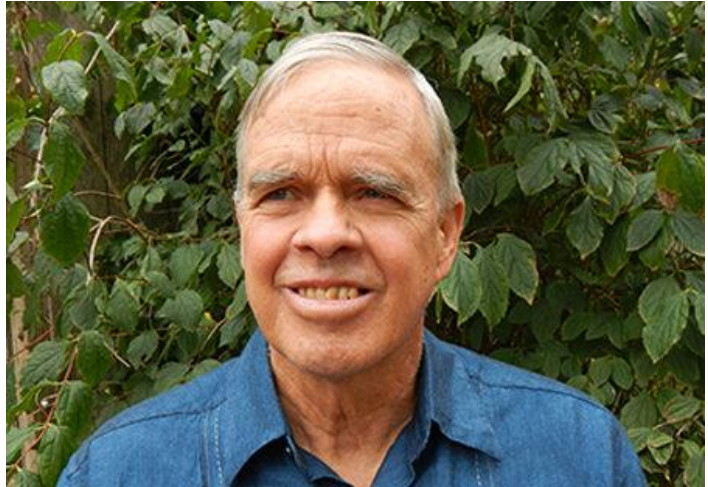
NP 共同創設者の David Hartsough の

生涯と遺産を称える

2025年3月24日 (Nonviolent Peaceforce のサイトから)

深い悲しみとともに、非暴力平和部隊の共同創設者であり、非暴力行動の生涯にわたる提唱者であるデイビッド・ハートソーの逝去をお知らせします。デイビッドは癌との闘いの後、84歳で亡くなりました。デイビッドは、平和は可能であるだけでなく、積極的に構築されなければならないという揺るぎない信念に人生を捧げました。彼の非暴力へのビジョンとコミットメントは、1960年代の公民権運動の座り込みからコソボでの平和構築活動、そして Peaceworkers, World Beyond War, Nonviolent Peaceforce 非暴力平和隊を含む複数の平和団体の創設まで、無数の運動を形成しました。彼の回顧録「*Waging Peace: Global Adventures of a Lifelong Activist*」は、非暴力行動の最前線で過ごした数十年の物語です。

1999年のハーグ平和アピールで、デイビッドの *nonviolent peaceforce* のためのデイビッドのビジョンは、強力な共鳴を



見出しました。メル・ダンカン、メアリー・ルー・オット、その他の先見の明のある活動家と協力して、デイビッドはこの夢を現実に変えるのを助けてました。2002年、彼はインドのスラージュクンドの49カ国の平和構築者の中に立ち、非暴力平和部隊を正式に設立しました。わずか1年後、NPの最初の民間保護チームがスリランカに駐留し、非暴力平和維持への永続的なコミットメントの始まりを示しました。

デイビッドは創始者以上の存在であり、非暴力行動の柱でした。彼は並外れた勇氣を持って原則を生き、正義の最前線に立ち、戦争と軍国主義に抵抗し、非暴力抵抗の技術で他の人をたゆまず訓練しまし

た。彼は、孤立は平和構築者にとって致命的であり、連帯は命を救うことができることを理解しました。彼のライフワークは、暴力に直面しているコミュニティが一人ではないこと、非武装の民間人保護が目に見える慣行になること、そして非暴力が変化のための揺るぎない力であり続けることを保証しました。

デイビッドの影響は個人的なつきあいの間においても大きかった。NP エグゼクティブディレクターのTiffany Easthomは、次のように述べています。

「デイビッド・ハートソーにとって平和

と非暴力運動は自然なものであり、非武装の民間人保護の力に対する彼の信念は理論的なものではなく、彼が毎日どのように生きているかでした。彼のビジョン、揺らぎのない楽観主義、そして暴力を避けられないものとして受け入れることへの拒否がなければ、非暴力平和隊は今日のように存在できなかったでしょう。彼の働きは私たちの使命を形成し、彼の遺産は私たちが実行するすべての保護行為に織り込まれています。デイビッドはNPの仕事に深くコミットしていました。

何年にもわたって、私はしばしばサンフランシスコでNPをさまざまな形で代表し、デイビッドと彼の妻、ヤンと過ごす

ことは私の訪問の有意義な部分になりました。これらは決して友好的なキャッチアップではありませんでした——デイビッドは常に用意していました。彼のクリップボードを手に私の向かいに座って、彼は資料と、話し合うための緊急な課題

のリストを持っていました。彼は思慮深く、探求的な質問をし、私の思考に挑戦し、彼の人生の仕事を定義する忍耐力をモデル化しま



デイビッド・ハートソー David Hartsough
1960年、バージニア州アーリントンの人種差別撤廃キャンペーン。

した。創造的な非暴力への彼の揺るぎないコミットメントは、最も扱いにくい状況でも解決策を提供し、彼を知る特権を持つすべての人に永続的な影響を与えました。」

なかったことを知っています、そして彼は私たちが今日続けている仕事を含め、彼が構築したすべてのものを通して生き続けています。この悲しみは言葉では言い表せません」



2001年、非暴力平和部隊の共同設立者デイビッドとメル・ダンカン

彼の逝去を悼むとき、私たちはデイビッドが進めたビジョン、すなわち紛争が武器ではなく、勇気、プレゼンス、そして私たちの共有された人間性への揺るぎない信念で満たされた世界へと再びコミットします。

デイビッド、安らかに眠ってください。あなたの光は、平和の道を歩むすべての人の働きに続けます。

NP ボードメンバーTiff Tool は話します。

「2012年にサンフランシスコに引っ越したとき、デイビッドと妻のヤンは私たちの最初の友人で、私とフランクに愛情をもって仲間入りさせてくれました。私は家族と一緒に彼のエコー湖キャビンに何年も過ごし、彼と一緒に旅行しました。彼は私の最も素晴らしい友人の1人であり、多くの愛、判断、そしてすべての人の世話をしています。私は心を痛めています、NP は彼なしでは今日のように存在でき

「正義への揺るぎないコミットメント、彼の深い優しさ、そして人類に対する彼の無限の信念は、私たちを鼓舞し続けます」と Tiffany Easthom は言います。

「私たちは彼のビジョンを前進させることによって彼の人生を称えます。」

世界は平和への貢献者

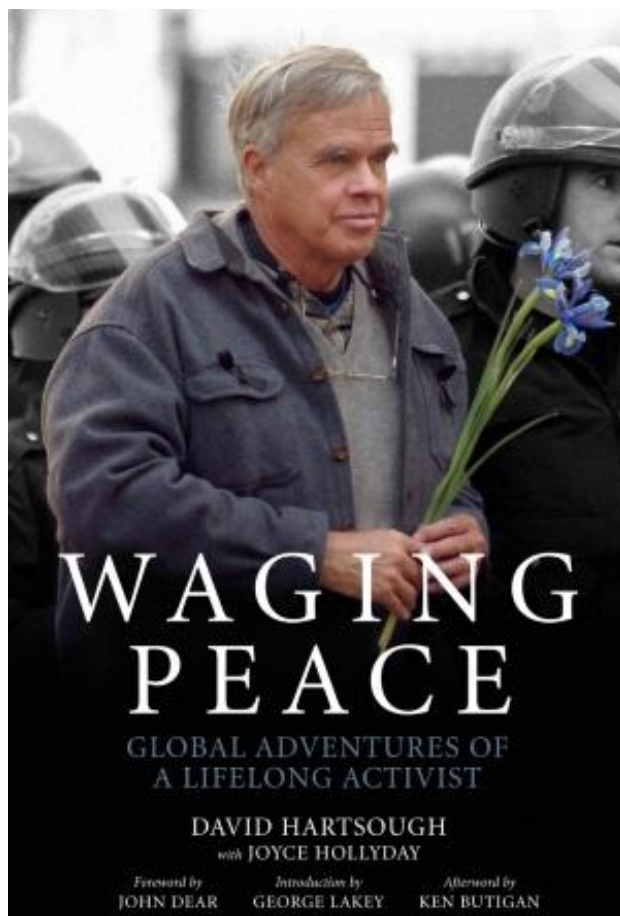
デイビッド・ハートソーを失った

WAR IS A CRIME のサイトから

84歳で癌で亡くなったばかりのデイビッド・ハートソーは、近年そしてそれ以前の平和活動の巨人であり、また平和活動以外の世界においても巨人でした。彼ほど、他の人々の活動にスポットライトを当て、その活動を促進し、他の人々の活動を組織し、資金を提供し、支援することに力を注いだ人物はいなかった。デイビッド・ハートソー自身の物語は、すべての人々のために精一杯生きた人生というジャンルの中で、最も注目に値するもののひとつである。

デイビッド・ハートソーの物語の一部は、2014年の回顧録『Waging Peace (平和を築く、実現する)：生涯活動家の世界的冒険』で語られている。この驚くべき本の中で、デイビッドがジム・クロウによる人種隔離に反対する座り込みに参加する姿が描かれている。ナイフをのどに突きつけた男に対し、どうだろうと君を愛していると言い、男の手からナイフが床に落ちる音が聞こえる。

150回以上の逮捕を含む非暴力行動のデイビッドのキャリアは、世界中を駆け巡る。ジョン・ケネディ大統領のような人物と会い、平和的な歩みへと説得する。数々の運動や組織の創設に貢献。1987年には「ニュルンベルク・アクション」を共同設立し、米国から中米への軍需物資輸送列



車を阻止した。(ともに線路に座り込んだ)ブライアン・ウィルソンが(列車にひかれ)脚を失ったとき、彼は幸運にも脚を保つことができた。文字通り、戦争を非暴力の部隊に置き換えるための活動の誕生に貢献する。2002年、ハートソーは非暴力平和隊を共同設立。ソビエト連邦、ニカラグア、フィリピン、コソボなどにおける主要な平和活動を振り返ってみると、デイビッド・ハートソーはその渦中において、協力し、励まし、より大きく、より強く、より原則的なものになっている。

ウィンスロー・マイヤーズ Winslow Myers の言葉を借りれば、「ハートソーが創造的な非暴力の行いを一生のうちにすべて詰め込むことができたとは到底思えない...彼の非暴力抵抗運動への支援活動は、北ベトナムに医薬品を届ける努力から、イスラエル人とパレスチナ人の和解、ソ連が崩壊しつつあったロシアの反体制派への支援、フィリピンのマルコスへの抵抗など、何十年にもわたり両大陸にまたがっている。こうしてハートソーの本は、アメリカや他の多くの国々が、しばしば残忍で誤った軍事介入に頼ってきたという「公式の物語」に対抗する、驚くほど包括的なオルタナティブ・ヒストリーとなった...ハートソーは、革命派の憎しみ、恐怖、核爆弾を含む兵器よりも強力な一つの力、つまり、敵対すると思われる相手に対しても無害であり、親切であり、親切である人間の能力の生きた模範であ

る。楽観的に言おう。平和が主流となり、帝国への妄信的な見栄がもはや安全保障への王道とは見なされなくなったとき、私たちが利己主義と排外主義の空虚さに目覚めたとき、他国を爆撃するのではなく、善意と資源を分かち合う機会として関わり始めたとき、それはデイビッド・ハートソーのような、十分に知られていない巨人たちのたゆまぬ努力の賜物である。

2013年頃、私は *War No More: The Case for Abolition* (戦争はもういやだ：廃止のためのケース) という私の書いた本を持ってツアーをした。この本には、後にリア・ボルジャーに続いて World BEYOND War の 2 代目理事長となるキャシー・ケリーが序文を寄せている。当時、ワールド・ビヨンド・ウォーはデイビッド・ハートソーの頭の中のアイディアに過ぎなかった。デイビッドは私に、この本のアイディアを実現すべきだと言った。デイビッドは、それを企画するために一緒に働くよう私を説得した。デイビッドは長年にわたって何度もこのようなステップを踏んできたが、私にとっては初めてのことだった。ジョージ・レイキー、ジョン・パッション、マイク・ファーナー、コリーン・ケリー、ルース・ベン、リア・ボルジャー、ネイサン・シュナイダー、ハキーム、ポール・チャペル、コリン・アーチャー、キャシー・ケリーらとともに、私たちは企画書を作成した。私たちはカリフォルニアの

森の中で、聡明な人々を集めて合宿を開催した。私たちは、世界規模で運営され、戦争という制度全体を迫及し、教育と非暴力活動を行う組織を立ち上げることを約束した。私たちはその組織を **World BEYOND War** と呼ぶことにした。(ビヨンドを大文字にしたのは、ちょっとした助けなしにこの名前を正しく理解できる人はほとんどいないことを、私たちが徐々に理解した後だった)

デイビッド・ハートソーはワールド・ビヨンド・ウォーの初期に深く関わっていた。彼のポッドキャストを聴いたり見たり、ワールド・ビヨンド・ウォーのウェブサイトや私自身のウェブサイトで彼の発言を読むことを強くお勧めする。これらのコレクションには、ワールド・ビヨンド・ウォーがデイビッドに敬意を表して名付けた賞の受賞者に関する記事が含まれてい



ることに気づくだろう。優れた仕事をしている人々を称えることは、デイビッドの活動の大きな部分を占めていたのだから、とても適切なことだ。

また私たち活動家が、デイビッド・ハートソーがまだギリギリ生きている間に（私もそう思ったし、彼の主治医もハートソーにそう言っていた）、つくったデイビッド・ハートソーの功績を称えたビデオも見るができる。しかし、それは4年早すぎた。デイビッドは戦争以上に癌を受け入れなかったのだ。

彼は力を取り戻した。ワールド・ビヨンド・ウォーの理事会に復帰した。先週まで、Zoom の電話や E メールのスレッドには必ず参加していた。彼は私たちを前進させ、鼓舞するような存在だった。

私たちは今、「安らかに眠ってください」とは言えない。

デイビッドに敬意を表し、平和のために働こう。

非暴力的な市民的不服従のために150回以上逮捕された。彼の最初の逮捕は、ハーワード大学の学時代、1960年バージニア州アーリントンのランチカウンターでの最初の公民権運動の「座り込み」に参加して。

NP/NPJ 設立当時の新聞記事から

■丸腰の市民ら、9条の理念を紛争地で実践 2001.04.13 朝日新聞

オランダ・ハーグで99年5月に開かれた平和市民会議で、決議文の中に「各国は日本国憲法9条を見習うべきだ」と明記された。それから2年。欧米やアジアの平和運動家や学者が、決議の趣旨や憲法前文の平和主義を生かすために結成を呼びかけた「国際非暴力平和隊」が形になるようとしている。スタートは、丸腰で武力と向き合う訓練を積んだ200人規模のボランティア部隊。世界各地の紛争現場に飛び出して護衛の同行や監視活動にあたる。日本でも憲法記念日を前に実践部隊結成の動きが出ている。(本田雅和)

「非暴力平和隊」を呼びかけたのは米国のメル・ダンカン、デビッド・ハートソーの両氏。2人は1年かけて世界を回り、1000人以上の平和活動家、学者、軍関係者、政府関係者、経済人に協力を要請。すでにボランティア約100人が米サンフランシスコやカナダのオタワ中心に準備活動に入っている。インドに亡命しているダライ・ラマやノーベル平和賞受賞者のオスカー・アリアス元コスタリカ大統領、東ティモールのホセ・ラモス・ホルタ氏らも趣旨に賛同している。

ハートソー氏の計画では、最初は20

0人の現役隊員、400人の待機隊員、500人の支援者でスタートし、10年以上かけて、それぞれ10倍の規模にしていきたいという。隊員2000人規模だと訓練や現地派遣などに年間7000万ドルの予算が必要だと試算しているが「世界の軍事費の1時間分にも満たない」とハートソー氏は語る。

冷戦後に続発した地域紛争の中で、丸腰の市民が平和を構築することは可能なのかどうか、小さな実践が断続的に繰り返されてきた。

例えば、ガンジーの非暴力不服従主義を引き継ごうとカナダで発足した国際平和旅団(PBI)は85年から4年間、グアテマラの人権団体の要請を受けて女性リーダーたちを護衛した。

当時、この団体のメンバー2人が暗殺され行方不明者も後を絶たず、軍部との緊張が続いていた。PBIのゼッケンを付けたボランティア数人が24時間体制で集会やデモ、買い物にまで同行した。以後、暗殺はやんだ。

同様の非暴力的介入の実践で知られるようになったのは、ウィットネス・フォー・ピース(平和の目撃者)、バルカン平和隊、クリスチャン・ピースメーカー、国際友和会、戦争抵抗者インターナショナル

ルなど約20団体。一つひとつは数人から数十人規模の小さなプロジェクトとはいえ、活動の場所はニカラグア、グアテマラ、メキシコ、コロンビア、スリランカ、カナダ・ケベック州、バルカン諸国、イスラエル、パレスチナなどに広がっている。

一方で9条の「発祥地」日本からの参加者は、ほとんどいなかった。ハートソー氏らは昨年5月、ニューヨークの国連本部で開かれた非政府組織（NGO）フォーラムで、憲法学者の君島東彦・北海学園大助教授に平和隊構想をもちかけた。

君島助教授の呼びかけに、スリランカでPBI活動に携わったことがある大畑豊さん（37）や市民団体ピースボートの若者たちが応じた。

昨年12月には、平和隊の日本サポートグループが誕生し、勉強会を重ねてきた。

2年前のハーグ会議では、コソボでの人権侵害・虐殺を止めるための北大西洋条約機構（NATO）軍の空爆をどう見るかで、集まったNGOの評価が大きく割れた。

「欧州にはナチスの台頭を許した苦い経験がある。明白な人権侵害をやめさせるための実力行使はやむをえないのではないか」「ユーゴ空爆も多くの民間人を巻き込んで傷つけ殺した。暴力は暴力を生むという連鎖を断ち切るためにも非暴力で臨むべきだ」

答えは今もない。ただ、ハートソー氏

や君島助教授は「日本国憲法は一国平和主義ではない。9条のもとでどんな国際貢献ができるかを模索しなければならない」と話す。非暴力平和隊は、その一つの実践だ。

■非暴力平和隊、11月発足 「する」平和主義へ、日本から積極支援

2002.04.25 朝日新聞

紛争地域に丸腰の市民が100人規模で赴き、「人間の盾」となって暴力や人権侵害を防止・監視する「非暴力平和隊（Nonviolent Peaceforce＝NP）」が11月末、インドのデリーで設立総会を開き、正式に発足する。「こうした国際貢献こそ日本国憲法の理念に合致する」と国内でも若手憲法学者や平和運動家が「日本グループ」を組織し、積極的な支援をしている。（社会部・本田雅和）

NPのアイデアは、直接的には99年5月のハーグ平和市民会議での議論に触発された米国の平和運動家デビッド・ハートソー氏らが世界に呼びかけた。背景にはインド独立運動のガンジーや米国公民権運動のキング牧師らによる非暴力・不服従・直接行動主義の理論と実践の歴史がある。

他方には、第1次大戦後のパリ不戦条約から第2次大戦後の日本国憲法前文・9条に至る、20世紀の国際社会での「戦争違法化」の流れがある。

憲法前文は公正な世界秩序を作るため

の積極的行動を求め、前文の「平和的生存権」を具体化した9条は、方法としてあくまで武力を使わないことを要求している。

日本グループ共同代表の君島東彦・北海学園大学教授によれば、日本の平和運動は長年、憲法9条に焦点を当て「米国の戦争に加担しない」「自衛隊を海外に派兵しない」といった〈しない〉平和主義が中心だった。「〈しない〉平和主義が果たした役割は大きい、それだけでは不十分だった」と君島教授らは、〈する〉平和主義を提唱する。

NPの活動内容は、命を狙われている人々との同行・同居による保護・救出、人権侵害の記録・公表、敵対する両者間の仲裁・調停、紛争後の平和構築のための支援など。パレスチナや中南米などでこれまで人権NGO（非政府組織）が担ってきた活動から国連平和維持活動（PKO）の領域まで含む。こうした活動を100人単位の非武装市民が担い、「武装部隊の活動領域を少しずつ減らしていく」ことをめざすのがNPの特徴だ。

長期的には、暴力や差別、貧困をなくすための社会・経済構造の変革運動やそのための国際的枠組みづくりなどにも活動を広げていく。

紛争地域に赴く隊員には監視者としての冷静さが求められる。武装集団の挑発に乗らずに身を守るための「非暴力トレーニング」が3カ月程度は必要だという。

もちろん隊員の生命を不必要な危険に

さらすわけにはいかない。ハートソー氏や君島教授、グアテマラ・リゴベルタ・メンチュ財団のクラウディア・サマヨア代表らによる国際運営委員会は現在、いざというときの撤退条件も含めた行動基準づくりに全力をあげるとともに、試験プロジェクトの中身や派遣先をつめている。

パレスチナで平和行進中にイスラエル軍の銃弾の破片を受け、帰国して療養中の留学生、清末愛砂さん（30）＝東京都出身＝は、NPについて「武力による抵抗はさらなる武力を招く。最も有効で現実的な闘い方は、やはり非暴力直接行動主義だ」と語る。6月、再びパレスチナにたつ。

■デビッド・ハートソーさん

非暴力平和隊の発足準備に奔走

2002.05.31 朝日新聞

「確かに昨年9月11日以降、平和運動なんかテロに対して無力じゃないか、という逆風が吹き荒れた」

非武装丸腰の市民が100人規模で紛争地に入り、人権侵害の監視、仲裁、平和構築活動に当たる「非暴力平和隊」を11月末に立ち上げるため、30カ国以上を駆け回ってきた。「世界の米国の軍事力でも、市民の安全は守れなかった。貧困と格差を克服し、非暴力運動に資金をつぎ込むことこそ安全につながる」

【17 ページへ続く】

デイヴィッド・ハートソーへの言葉

・徳留 由美

(NP ミンダナオ・プロジェクト、スリランカ・プロジェクト)

NP 創設者デイヴィッド・ハートソー氏の逝去を聞き、NP での活動の日々を思い出しました。私はありがたいことに、ミンダナオ・プロジェクトの初期活動と、スリランカでの政府軍・反政府軍の停戦合意が破棄された時期に、活動させて頂きました。市民が直接紛争地にて、現地の市民たちと一緒に平和活動に従事する。この経験は、私にとってかけがえのない活動となりました。

私は映像でしかハートソー氏を拝見した事ありませんが、NP の創設に尽力された方の冥福をお祈りいたします。

・大島みどり

(NP スリランカ・プロジェクト)

21 世紀が始まるタイミングで、これからの世界を「非暴力」で再生させようと考え、行動に移した David H. の深慮と行動力、そして最後まで信念を貫いた真摯な姿勢は、多くの人々に希望と勇気を与えた。世界は今さらに混迷の時代に陥り、世界各地で人々が死と恐怖、絶望に直面し、一瞬先も見えない状況に陥っている。彼が持っていた理念と理想のバトンを引継ぎ、実現させるために、私達ひとりひとりが

最大限の挑戦をしていかななくてはならない。それが、彼が残していったメッセージだと思う。

「非暴力」という人間に与えられたパワーを、世界中の人々と共有し、生きていきたい。

いつか、あなたに笑顔でご報告できるように。ありがとう、D. ハートソー。

・飯高京子

(NPJ 会員、日本友和会)

私が米国ケンタッキー州の Berea Colledge に留学していました 1960 年代には、公民権運動が進行中でした。クエーカーの礼拝会に出席していたので、ハートソー氏のようにワシントンの国会議事堂へ行って座り込みをしては収監され続けた友人たちに出会いました。貴女は日本人だから、参加するのはまずいと止められ、友人たちが信念をもってワシントンへ出かけるのを見送り、無事を祈って帰りを待った事を思い出します。

現在の日本は、丁度戦前の様子に似てきました。理不尽なことをおかしいと発言するにも勇気が必要になりつつあります。平和を作り出すためにどのように行動すればよいのか。

どうぞ、ハートソー氏やダンカン氏のように相手を尊重しつつ、話しあいや必要な対応が取れますように。

インド訪問記

NPJ 会員 水野郁絵

この春、津田塾大を卒業し社会人になりました。卒論でジーン・シャープを取り上げました（編集部、ニュースレター90号参照）

非暴力平和隊会員の皆さま、こんにちは。水野郁絵と申します。

私は昨年（2019年）の11月、人生で初めてインド（ニューデリーとバンガロール）を訪れました。このたび、NPJ ニュースレターへの寄稿の機会をいただきましたので、私のインド訪問記、ニューデリー編をお届けします。

そもそも、なぜインドへ行きたかったのか？

理由は主に5つあります。

- ・ **国立ガンディー博物館を訪れたかった**
ガンディーの思想を学ぶうちに、いつかガンディーゆかりの地を訪れたいと思うようになりました。ニューデリーのガンディー博物館には、当時の貴重な所持品が展示されており、併設の図書館には関連書籍が揃っているそうで、ちょうど非暴力に関する卒業論文を執筆している時期でもあり、この機会に訪れることで新たな刺激を得られるのではないかと考えました。

- ・ **インドの友人に会いたい**

大学時代、14カ国の青年たちが集まる国際交流プログラムに参加しました。その時に、インド参加青年と親しくなり、

プログラム最終日に私は1年以内の目標を発表する場で「インドに行く！」と宣言しました。この約束を果たすためにも、今回インドに行こうと思いました。

- ・ **周りの人たちが行かなそうなところに行きたかった**

私にとって、このインド旅は卒業旅行でした。卒業旅行といたら、ヨーロッパなどが定番ですが、私はあえて人とは違う場所に行きたかったのです。

- ・ **グローバルサウスを牽引するインドを自分の目で見たかった**

国際社会で影響力を増しているインド。特にグローバルサウスのリーダー的存在として急成長を遂げる経済の実態を自分の目で確かめたいと思いました。

ニューデリー編

11月上旬、私は友人とインディラ・ガンディー国際空港に降り立ちました。空港を出てみると、そこは夜10時を過ぎているのに人、人、人だらけ。早速、世界人口第1位の国を肌で体感しました。その後、なんとかお迎えの運転手のおじさんを見つけて合流し、車に乗ってホテルへ向かいました。車が走り出すと、3秒に1回は必ず聞こえるクラクションの

音。交通ルールなんておかまいなしに車やリキシャが次々に割り込み、その間を器用にすり抜けて渡る人々。クラクションの音を気にする様子もなく、道路端に寝そべる人と犬。「なんか私、すごいところに来ちゃったな」と車の窓越しに思いました。それと同時にインドにいるという実感がじわじわ湧いてきました。

翌日、インド人の友人と合流し、カレーを食べに行ったり、大統領官邸とライトアップされたインド門を散策したりと、充実した時間を過ごすことができました。

しかし、インド滞在3日目、外出中に急に体調不良に襲われ、ついにはニューデリー駅で嘔吐してしまいました。原因は前日に食べたカレーなのか、それとも水



なのか（水はペットボトルの蓋がきちんと閉まっているものを飲んでいました）。色々と考えましたが結局、何が原因だったのかわかりませんでした。

5日目、ようやく体調が少しだけ回復したので、念願のガンディー博物館と Raj Ghat（ラージガート）に行くことができました。この日を逃すと日程的に厳しかったため、万全とはいえない体調でしたが、思い切って出かけることにしました。友人と地下鉄のデリーメトロに乗り、ガンディー博物館へ向かいました。

建物に入ると、ガンディーの胸像とチャルカが飾られていました。受付でパンフレットをもらおうと、受付のおじさんに、「君たちはどこから来たの？」と尋ねられました。日本から来たことを伝えると、おじさんは「そういえば、ノーベル平和賞を受賞したのは日本の団体だよ、名前を教えてよ」と言われました。私は、日本被団協がノーベル賞を受賞したことくらいしか知らず、それ以上の説明ができませんでした。その後、おじさんは私がスマホで見せた日本被団協の情報を見ながら熱心にメモをとっていました。歴史の授業で戦争や原爆のことを学んできたはずなのに、いざ質問されると、十分に説明できる知識を持っていませんでした。私は自分の無知を痛感すると同時に、もっと学ばなければと強く思いました。



ガンディー博物館には、貴重な写真や所持品が飾られていて、私は一つひとつをじっくりと見ながら回りました。数々の写真を通じて、ガンディーの生涯や非暴力・不服従運動の歴史を学ぶことができ、ガンディーの生き方がいかに多くの人々に影響を与えたのかを実感することができました。建物の奥に進むと、少し薄暗い部屋がありました。そこには、ガンディーが暗殺された時に着用していた衣服や時計、銃弾までも展示されていました。特に印象的だったのが真っ白の衣服に当時の血痕がはっきりと残っていたことで、その生々しさに言葉を失ってしまいました。その隣にはガンディーの有名な言葉「My life is my message」が掲げられており、ガンディーの生き方そのものが彼の思想を体現していると感じました。また、併設の図書館では、『ヤン

グ・インディア』や『ハリジャン』を見せてもらい、貴重な資料に直接触れることができました。

その後、ガンディー博物館から徒歩で数分の場所にある Raj Ghat にも行きました。Raj Ghat はガンディーが火葬された場所で墓碑があります。広大な敷地には静かな空気が漂い、平日にも関わらず多くの方が訪れていました。Raj Ghat を後にし、ガンディーが暗殺された場所が博物館になっている Gandhi Smriti へ向かおうとした矢先、再び体調を崩し、駅のホームで動けなくなってしまいました。結局、Gandhi Smriti へは行くことができませんでしたが、ガンディー博物館と Raj Ghat をめぐること、ガンディーの思想や足跡に触れる貴重な機会になりました。

まとめ

ここで書ききれないほど、インドでは本当にさまざまな経験をしました。目にするものすべてが新鮮で、驚きの連続でした。一見すると無秩序に見える社会の中で、人々はそれぞれ自分なりのリズムで生きていて、その力強さとしたたかさに私は何度も圧倒されました。

また、ガンディー博物館を訪れたことでガンディーの生き方や非暴力の実践の一端を学ぶことができました。展示されていた所持品や写真、言葉の数々から、彼

が生涯をかけて貫いた信念と、その影響力の大きさを直接感じる事ができたのは有意義なもので、現地ならではの学びを得る事ができたと感じています。今回の旅を通じて、異文化に触れることの面白さや、自分の無知を知ることの大切さ、そして「知ること」が世界を広げる力を持つことを改めて実感しました。実際に現地へ足を踏み入れ、混沌とした環境の中で過ごしたことで、私の「世界の見え方」は大きく変わったように思います。インドで得た経験は、私にとって忘れがたく、かけがえのないものとなりました。



Raj Ghat

【12 ページからの続き】

高校時代、教室で広島の被爆女性の語りを聞き、原爆の映画も見て、人生が変わった。

「あれほどの苦しみを受けながら、原爆を投下した者を憎み、報復を叫ぶのではなく、二度とこの苦しみをもたらさないことに全力をあげると話していた」

高校生としてアラバマでのキング牧師の「バスボイコット運動」に参加。学生がほとんど黒人のハワード大学（ワシントン）に入学し人種差別撤廃運動では毎週のように逮捕された。

60年、バージニア州の白人専用レストランで抗議の座り込み中、国粹主義者から「黒人好きめ」と胸にナイフを突きつけられた。1人なら無力感に打ちひしがれていたかもしれない。

が、仲間と数百人の群衆が見守っていた。冷静に「あなたが正しいと思うことをしなさい」と話した。男は去った。そんな経験の積み重ねが、「非暴力は世界を変えうる」との確信に結びついていった。

来日のたびに改憲の動きを気にする。「日本国憲法こそ国際貢献のモデル」と若者の参加を呼びかける。

(文・写真 本田雅和)

NARPI 2024夏季平和構築研修 in 水俣・宮崎についての報告



本報告は、NARPI 2024 Annual Report からの抜粋を用いて、日本語で執筆しています。
(文責：奥本京子、NARPI)

2024 年度も NPJ からご支援をいただき、NARPI（東北アジア地域平和構築インスティテュート、ナルピ）を開催し、総勢 105 名（大人 92 名、子ども 13 名）が参加し、実り多いプログラムを無事終えることができました。

前半は水俣におけるフィールドトリップで、真夏の暑さが厳しい中、参加者は熱心に学びの 2 日間を過ごしました。水俣市は、工場排水に含まれる有機水銀による環境汚染や健康被害、そして地域社会の分断を経験した都市です。しかし、この悲劇に直面しながらも、修復的正義を含

む環境正義と環境平和の豊かな文化を育んできました。

フィールドトリップでは、熊本大学の石原明子さんが中心となって、水俣市民と一緒に企画してくださいました。一般財団法人水俣病センター相思社、チッソの正門前、排水口、エコパーク、記念碑などを訪問し、複数の生存者や支援者の証言を聴き、ナルピのグループ内で振り返りを行いました。水俣は温泉でも有名であり、夜には温泉旅館に宿泊し、サステナブルで平和的かつ創造的なランチやディナーを堪能し、豊かな自然にも触れることができました。



水俣に正義と平和の文化を築いてきた水俣病公害サバイバーは、今や高齢になりつつあり、彼らの話を直接聞く機会は貴重です。今回は、3 人の被害者リーダーから直接お話を伺う機会を得ました。許しと修復的正義の精神で人々を導いてきた緒方正人さん。ストーリーテリングや祈り

の人形作りを通じて社会にインパクトを与え続けている緒方正実さん。そして、水俣病の胎児患者である永本賢二さん。彼の父親は、汚染の原因となったチッソの従業員でした。

水俣には、過去の悲劇から学び、未来に向けて環境に優しく平和な社会を創り出すために努力している素晴らしい若い世代がいます。この若い世代が NARPI の活動プログラムを提供してくれたことも意義深いものでした。グループに分かれて、有機和紅茶の試飲、水俣海岸での自然体験、日本の伝統的な紙漉き体験などが行われました。また、水俣の悲劇からの再生と平和構築を表現した創作舞踊「水俣ハイヤ」を練習するグループもありました。これは、水俣病の苦しみを「神からの贈り物」と語った、被害者リーダーの杉本英子さんが創作したものです。

水俣での最後のプログラムは、平和を目指す若きヴィーガンシェフ、吉村淳さんが、緒方正実さんの「チッソは僕だった」というテーマに基づき料理を提供し、みんなで食べるピースディナーでした。ディナーの最後には「水俣ハイヤ」ダンスが披露され、アンコールの嵐が巻き起こり、自然と NARPI 参加者のほとんどが踊りに加わり、水俣の魂を込めて踊る国際的な人々の姿は壮観でした。

企画者の石原さんによれば、これらの

経験は NARPI の参加者にとって有意義であっただけでなく、水俣の若い世代にも大きな影響を与えたそうです。水俣の若者たちは、NARPI の参加者を迎え入れることで、水俣の価値を再認識し、自分たちの未来像に自信を持つとともに、水俣が世界平和にとって非常に重要な場所であるという確信を得ることができたとのこと。

後半は宮崎において、5つのコースが開講されました。参加者は5日間、以下のいずれか1つのコースを選択しました。

- 紛争と平和の枠組み
- トラウマ意識の向上による平和構築の最適化
- 紛争と平和構築におけるジェンダーとセクシュアリティの探求：芸術に基づくアプローチ
- 修復的正義：私たちの社会と地球を癒す
- 平和構築プログラムをつくる

2024年度は、開始直前に宮崎沖で地震が発生したこともあり、特に海外からの参加者には大きな不安がありました。さらに、宮崎に移動してから数名のコロナ感染が発覚し、企画者である宮崎国際大学の笠井綾さんにとっては、心労が絶えない日々でした。その結果、コースが1日早く終了せざるを得なかったのは残念でしたが、宮崎国際大学の学生や笠井さん

のネットワークを中心に、多くの方々の
献身的な支えと創造性によって、なんと
か5日間を乗り切ることができました。

コロナ感染の対応のため、4日目の夜に
予定されていた **Culture and Talent
Night** は中止となってしまいました。しか
し、参加者の自主的な呼びかけにより、5
日目に **Culture Beach Party** が開催され
ることになり、ナルピがまさに運営側と
参加者との共創であることを実感させて
くれました。多くの困難を乗り越え、その
精神が生かされた瞬間でした。ナルピは、
新しい友情と学びを体験するだけでなく、
地震の不安やコロナ禍の困難を乗り越え
たことを祝う場にもなりました。ただし、
コロナ感染者は自主隔離を続けたままで
あり、その場に参加できなかったのは残
念でした（報告者もその一人です）。

恒例のコースでの学びだけでなく、若
者が集まって話し合う「ユース・イニシア
ティブ」と呼ばれる集いも、2023年のナ

ルピ（モンゴル・ウランバートル）から始
まっています。ナルピでは、設立メンバー
がいつまでも「居座る」のではなく、次
の世代にバトンタッチできるよう、意識的
に議論を続けてきました。その成果とし
て、大学生や大学院生、さらには20～30
代の若者が、今後のナルピや東北アジア
の平和創造の在り方について意見を交わ
す場が生まれています。今回は、ネットワ
ーキング、言語、ダイバーシティ、教育、
ウェルネスといった幅広いトピックをテ
ーマに、総勢33名が集まりました。この
取り組みをきっかけに、今後もナルピに
若者の声を積極的に取り入れていきたい
と考えています。

2025年度は、15周年を記念する年です。
4月末から1週間ほど、運営委員会メン
バーを中心にピースボートに乗船し、ナル
ピのこれまでの活動を総括・評価し、今後
の計画を立てる予定にしています。今後
のナルピを、どうぞ引き続きお支え下さ
いますよう、重ねてお願い申し上げます。



【大畑豊さん平和講演会】 勝つ方法はあきらめないこと
～急速に軍事化の進む琉球弧・辺野古非暴力闘争の現場から～

2024年11月2日「キリスト者・九条の会」北九州/NPJ 会員 川辺希和子

前号で前田恵子さんが報告されているので、簡単に報告し、参加者の感想をご紹介します。と思います。

大畑豊さんの写真や動画を見ながらお話を聞いていると、その「せめぎあい」が途切れることなく続けられている現場の状況がよく伝わってきました。

抗議行動に参加する人数が減っているが、自分たちに続く人が出てくると希望を持って続けていること、そして、少数人数であっても途切れることなく監視行動・抗議行動が続けられていることにより、建設を進める側の違法性や環境破壊、莫大な税金の無駄遣い等々に気づき抗議し、声を上げ、確実に工事を遅らせる力になってきたことを知りました。

参加者の感想

・私たちは毎日平和だと思って生活しているような気がします。実は沖縄で行っている様々な問題、事件を知らずに、他人事のように日本人は平和だ、戦争にならないはずだと思っていること、知ろうとすることを拒否している。報道も制限されているので、何が本当か知らされていない気がします。恐ろしいですね。現場の話が聞けて、大変びっくりし、自分の無知な事に気づかされました。もっと知らないといけないし、将来おそろしいです

ね。ありがとうございました。

・米兵による犯罪のニュースがほとんど報道されていないことを、改めて知りました。米軍基地が本土から移されても、沖縄の基地が増えたことを改めて知りました。辺野古の座り込みを応援しに行ったことがあります。普天間も行ってきました。度々飛行機が離着陸に騒音がすごかったです。若い方が今日お話し下さったような事実に関心を持ってくれますよう願います。

・“非暴力“というものの力を改めて考えさせられました。自分の決意の強さの必要性についても、再度自分に突き付けた。無関心に対してこれからも考えて考えて工夫して種を蒔いて行こうと思います。

・たくさんの沖縄の現場の事実は、現状を理解するのに、大きな助けとなりました。それと同じく大畑さんの活動の根本となっているその姿勢を説明していただいたことが、個人として大変納得できるものがありました。人間としてという視点から、平和を求め、歩む上での揺るぎないものを教えてもらい、大変感謝しています。お話を受けての質疑応答の時間、忌憚ない意見が交わされ、とても励みになりました。



Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本のウェブサイトの入会申込ページをご利用くださいますようお願いいたします。

◎正会員(議決権あり)

・ 一般個人: 10,000円

・ 学生個人: 3,000円

* 団体は正会員にはなれません。

◎賛助会員(議決権なし)

・ 一般個人: 5,000円(1口)

・ 学生個人: 2,000円(1口)

・ 団体 : 10,000円(1口)

■ 郵便振替: 00110-0-462182 加入者名: NPJ

* 通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。

■ 銀行振込: 三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義: NPJ代表 大畑豊

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを
通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ ウェブサイトからのお申込み: http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

厳しい情勢の折、皆さまからのカンパ、ご支援に心から感謝いたします。

(敬称略、10月～4月、33件、763,000円)

矢島十三子、浅田真理子、川辺希和子、矢吹道徳、木村啓子、馬渡雪子、本東宏、安藤博、大畑豊、武井陽一・めぐみ、大橋祐治、中見真理、俵恭子、野島大輔、飯高京子、朝倉恵、前田恵子、矢島十三子、平井敦子、塩見幸子、尾崎秀子、中森圭子、山本富士夫、水戸潔、山本賢昌、大島みどり、黒岩海映、木島廣子、熊谷喜代春、森島久恵、遠峰喜代子、石丸敏子、西浦昭英

デイヴィッド・ハートソーとは NP 設立総会、例年の NP 総会、また設立前にもインドでの非暴力会議でも会い、来日の際にももちろんお会いした▼あるとき、法政大学名誉教授、クエーカー教徒で良心的軍事費拒否の会・東京の代表でもあった石谷行(すすむ、故人)の自宅を訪問したとき、コーヒーか紅茶でもと勧められたとき「水を」とこたえる姿が、彼の質素な生活を象徴しているようで、とても感銘を受けたことを覚えている▼世界各地で非暴力による取り組みが盛んに行われるなか、武力紛争が各地で起き、止めることができないのはなぜか▼戦後 80 年。阿波根昌鴻写真全国巡回展が行われる。彼の実践と言葉を再考する場にしていきたい(大畑豊)